

「春城」開館の記

奥島 孝康

プロローグ

中央図書館の開館後一年が経過した現在思うことは、当初予測していなかった誤算が一つだけあったということである。それは、旧図書館から新中央図書館への移転業務が、予想した混乱はおろか、なに一つ重大な支障もなく、きわめてスムーズに完了したという「嬉しい誤算」であった。それくらい見事な移転作業といつてよかった。この史上最大の作戦ともいうべき大作業が成功を収めた裏には、なによりも館員諸兄姉の努力と献身があることはいうまでもなく、本稿も、まずその労をねぎらうことから筆を起す必要がある。

私は、開館六カ月前まで館長であったという立場から、なにかと学内外の人びとから新中央図書館についての印象・感想を聞く機会が多かったが、非難・批判のたぐいはまるでなく、聞こえてくるのは異口同音に心からの賛辞ばかりであった。中央図書館は、館員諸氏の健闘により、なにはともあれ、幸先よい船出をしたといわねばならない。

一 「市島春城記念室」をめぐる

もう六年も前のことになる。館長に就任した私は、まず早稲田大学図書館の「原点」とは何かを考えた（その一端は『図書館紀要』三〇号の拙稿参照）。そして、新中央図書館建設のスタートはとにかく「市島春城詣」から始めたいと思い、秋の館員旅行を復活して、新潟の角市市島家旧邸を見学し、念願の市島先生の墓参をはたした（一九八七年一月一日）。図書館のルネサンスはこうして始まった。

市島先生の活躍が多方面にわたっていることは周知のところであるが、その残された足跡の最大のものはなんといつても図書館人としてのそれであり、先生の令名はわが国の図書館史上不滅の光を放っている。初代図書館長として一五年間（明治三五年ないし大正六年）にわたる先生の在任中に、わが図書館はほぼ今日の骨格を形成したのみならず、日本文庫協会（設立明治四〇年）と、その後身の日本図書館協会（設立明治四一年）のそれぞれ初代会長に推され、わが国の図書館界に巨大な影響を及ぼされたのである。とりわけ、大正一四年に開館した旧図書館は、当時としては東洋一の規模を誇った最新鋭の大図書館であったが、市島先生は自ら募金委員長としてその建設に取り組まれたのであった。

建設に着手するにあたり、私は、新しい図書館にはなんとしても市島先生を顕彰するための工夫をこらしておきたいと考えたのであったが、なかなかよいプランが浮んでこなかった。ところが、さまざまな事情で、津田左右吉先生の記念会議室が旧図書館へ移されることになったので、そのために予定されていた会議室を、急遽、「市島記念室」とすることができた。遅ればせながら、図書館はここによりやく市島先生を永久に顕彰する機会を得たのである。

余談ではあるが、当時の図書館課長会一同の寄金により、新中央図書館の「魔除け」として、「ひいらぎ」の巨木を

中庭に植樹した。守護神市島先生と共に、新中央図書館の今後の発展を祈念する気持ちをこめて（『葛』八五号参照）。

二 「開設準備室」について

新中央図書館建設について語るのであれば、西原春夫前総長の決断力、濱田泰三元館長の構想力を逸するわけにはいかないが（それについては、また語るべき機会がある）、ここでは、「総合学術情報センター開設準備室」の調査役（室長）として、新中央図書館の内部仕様、設備、備品等のハードから、新しい組織・運営にかかわる一切のソフト、さらには、移転・開館の準備まで、万般にわたって一切の計画、交渉、契約、現場指揮の実質的責任者であった千葉敏さんについてのみ語っておきたい。私をしていわしむれば、中央図書館の移転・開館が成功したその功績の大半は千葉さんに帰すべきものであると思っているからである。

ご存知のように、あの飄飄としてシャイな風貌の千葉さんのどこに、あの緻密な頭脳と決然たる性格が秘められていたのかと驚かされたのは、私ひとりではなかったようである。それにしても、開設準備室の三年間ほど、千葉さんの三〇余年におよぶ最後の「オールド・ライブラリアン」としての見識と、その間に培った知識・ノウハウが見事に発揮されたときはなかったのではないか。私は、その千葉さんに、「旧き良き早稲田大学図書館員像」を見たと思っただ。にもかかわらず、開館を目前にして千葉さんは図書館を去った。「あたしや、新しい図書館の人柱になるのはイヤですよ」とのつぶやきを残して……。

もう一つ、千葉さんは、「上手に手をぬいて全体のバランスをはかるといふ仕事の進め方も、どこかで考えられるのではないのでしょうか」（『葛』八二号参照）という生前遺言を残している。その含蓄は、受け取る側によっては、ことによるといかようにも解しうるのかもしれない。しかし、その真意は明白である。館長時代、私は千葉さんから一番多

くのことを学んだ。そして、一番頼りにもした。しかし、否、だから、千葉さんは、自分だけは、過去二度の図書館建設当時の事務主任と同じような「人柱」にはなりたくないと考えられたのであろうか。そうであろうとなかろうと、本当のところは、千葉さんは開設準備に自己のすべてを出し切って、千葉さん独自のあの「斜」のスタイルで、やっぱり「人柱」になったのだと私には思えてならない。

いずれにしても、中央図書館の建設に託した千葉さんの夢は、見事に開花・結実したといわねばなるまい。その意味で、新中央図書館は千葉敏さんの入魂の傑作でもある（迷惑ですよ、そんなこといって……）という千葉さんのつぶやきが聞こえてくるような気がするが……。

二 コルヴェア文庫のことなど

八年ほど前のことであるが、図書館では、開館記念としていわゆる「スピノザ文庫」（約二億円）をアメリカから購入する交渉をしていたようである。ところが、契約の最終段階でアメリカの売手の側の都合により、急に破談となるにいたった（この文庫は結局のところアメリカの某大学の所有に帰したようである）。その直後に私が出会ったのが、現在中央図書館の至宝ともいべきいわゆる「コルヴェア文庫」（正式には「早稲田大学フランス経済・社会・思想文庫」という）であった。

館長就任直後、濱田泰三前館長（現常任理事）から、引継事項の一つとして紀伊国屋がなかなかいいコレクションを持っているから一度見てはどうかと薦められたのが、そもその事の発端であった。早速出かけ、一見してそのコレクションの質量に驚嘆した。そこには、私が長年探し求めてきた古書はもとより、それまで書名を耳にしたことがあただけの貴重書がほぼ網羅されていたのである（その概要は『館蔵資料図録』で私が簡単な解説を試みている）。そのと

き、私の脳裏に浮んだのは、この文庫こそ、わが図書館が誇る「小寺文庫」と内容的にも時代的にもきれいに接続するのではないか、ということであった。事実、その予想は的中した。このコルヴェア文庫は、内容的には社会科学全般にわたるものであり、時代的には小寺文庫の直前までをカバーするものであった。

この購入交渉で出会ったのが吉枝喜久保副社長（現特別顧問）であった。交渉は、吉枝さんの決断によって、実に氣持よく進んだ。吉枝さんは、早稲田大学のいわば無権代理人にすぎない私を信用され、その当時としては空前の大取引が成立したのであった。その後、吉枝さんとは、単なる取引先とか大学の先輩とかいう関係を越えて、その大学の未来展望に関する洞察と大学経営に対する見識とからいつも教えをいただく間柄となり、今日にいたっている。わが図書館が「日本のOCLC」を目指して和書の遡及入力事業を紀伊国屋とのジョイント・ベンチャーとして発足させることになった背景には、吉枝さんとの信頼関係が多少とも影響がなかったとはいえないように思われる。

人の出会いはまことに偶然というほかないが、そこで生れた信頼関係が思いがけない発展を見ることがあるということをつくづく感じたのは吉枝さんとの出会いである。よい出会いはよい結果を生む（和書の遡及入力という空前の大事業推進の中心となり、それを見事に完成させた中村義人調査役との出会いもそうであった）。こうして購入したコルヴェア文庫は、おそらく、わが図書館にとって永く「福の神」となり、今後さまざまな福を呼び寄せることであろう。なぜならば、この購入を契機として、わが図書館には続々とフランスの文献が集まり始めたからである。その典型例が、「杉捷夫フランス文学・言語学文庫」である。

ある日、平岡篤頼先生から、フランス文学者として高名な杉捷夫先生がその膨大なフランス文学・言語学の蔵書を受入れる都内の図書館を探しておられるとの知らせをいただいた。その翌々日、私は早速に西武池袋線の椎名町駅のそばの杉捷夫先生宅を訪れ、早稲田大学におけるフランスの社会科学系文献の充実ぶりを披露し、先生のフランス文

学系の文献をせひわが図書館で受入れさせて欲しい旨を力説した。そして、快諾を得た。

本との出会いは、実は人との出会いによる。蔵書家とのころのつながりである。そのことは、わが図書館の蔵する国宝二点や、前述の小寺文庫がいかに所蔵されるにいたったか、その経緯を想起するだけで十分了解されるであろう。そこに図書館のチャンスもあり、思いもかけないドラマが生れるのである。いずれにせよ、こうして、中国近世の通俗文学・民間宗教の資料から成る「風陵文庫」、いわゆる洋学資料である「桂川今泉文庫」、連歌を中心とする「伊地知識男文庫」など、二度と出会うことのできない貴重な資料も、わが図書館の所蔵に帰したのである。

四 「熊野路・古道」によせて

本年五月一二日、平山郁夫画伯（東京芸術大学学長）の「熊野路・古道」が、ついに新中央図書館中央大ホールの壁面を飾った。かねて、この壁画を「真理を求める旅」というテーマで平山先生にお願ひし、「求道」というテーマで画いていただくお約束をいただいた経緯については、すでに述べたことがあるので（『ふみくら』二六号参照）、ここでは省くことにする。絵が完成して院展に出品された後、昨年のことであるが、野口館長にお伴して平山画伯の代理人である村越画廊（銀座）へ交渉に出かけ、画伯の格別のご好意により破格の価格で収納させていただくことができた。しかも、その購入資金を、私も代表取締役の一員として名を連ねる早稲田大学出版部から寄附させていただくという幸運にさえ遭遇したのである。

ところで、熊野古道が古来より「修験道」として知られていることは、改めて指摘するまでもなからう。しかし、原始宗教のメッカであった熊野は、院政期上皇方のはなやかな「熊野御幸」とか、中世庶民の「蟻の熊野詣」とかに見られるように、複雑な顔をもっている。一方には、「山の熊野」という死者の国の顔があり、他方では、「海の熊野」

という常世の国の顔であり、「補陀落浄土」への渡海の出航地としての顔である。いずれにしても、熊野はいまお多くの謎に満ちた地であるといわなければならない。もとより、平山画伯がどのような意図で、どの顔の熊野を画こうとされたのかは知らない。けれども、どのような道であるにせよ、「道を求める人びと」の集まる目的地または出発地である熊野へ通じる道を画かれたことだけは確かである。そして、図書館もまたある意味では謎の国熊野なのである。熊野は人生の終着点であり、かつ、出発点である。図書館もまた、過去の人類の知恵の到達点であると同時に、未来への学問の出発点でもある。熊野古道は、真理を求める旅人の目的地であり、かつ、出発地である図書館へ続く道である。熊野古道の奥にさす光明は、学問の過去の栄光と未来の希望とを意味する。私はこの絵をこのように解釈してみたと思う。

「熊野路・古道」は、かくして、正面玄関に刻んだカトーの格言「読むことによつて知のなんたるかを知れ」（その由来については『ふみくら』二〇号の拙文を参照）と共に、新しい中央図書館のシンボルとなった。旧図書館の大観・観山の「明暗」がこれまでも、これからもそうであるように、この絵もまた今後永く早稲田大学の至宝として多くの校友たちの誇りとなることであらう。

五 「高田早苗記念館」の夢を追つて

私は館長在任中、新館開設準備については千葉敏さんに、日常業務・人事・研修については今井事務部長に委せ、また、図書館として最も重要な収書の業務とその方針策定については全面的に野口洋二副館長（現館長）にお願いしており、私自身は新規事業、協会関係事業等に専念していた。ところが、急に私が図書館から転出しなければならぬという事態が生じたため、私が仕掛けていたことの後始末を野口館長に託さざるをえなくなり、多大なご迷惑をおか

ける結果となった。たとえば、昨年、早稲田大学で開催された「私立大学図書館協会総大会」とか、「ドービス・ユ―ザー世界大会」とかは、以前から、中央図書館の披露を兼ねて、主催することを引受けていたものであった。いづれも腕力を要する仕事であったが、無事、成功裡に終了した。開館直後のあの大変な時期であっただけに、野口館長以下、館員諸氏の対応は水際立っており、深く敬服するとともに、心からなる感謝を捧げたい。

野口館長は歴史家である。それあってか、ロング・レンジのパスペクティブをもってわが図書館の未来を見すえておられる。事実、中央図書館の収書は、館長の歴史家としての見識を反映して、着々と実績が上ってきている。その意味で、中央図書館の今後は期して待つべきものがある。しかし、最大の問題は旧図書館の再整備との関連で出てくる本部キャンパス分館の問題であろう。図書館分館の整備は、本庄保存図書館から始まって、所沢図書館、理工学図書館、そして今年発足した戸山図書館と、比較的順調に進行した。残るは本部キャンパス図書館分館となることが予定されている旧図書館の再生である。ところが、これだけは他のキャンパス図書館とは異なって、五学部が関係しているため、調整にかなり時間と手間を要するという事情がある。

かねて、私は旧図書館は本部キャンパス図書館分館であるとはいえ、「高田早苗記念図書館」「高田図書館」と略称する)と命名し、本格的図書館として再整備すべきであるとの考えを抱いていた。学内には、現在、大隈講堂、大隈記念室、小野梓記念講堂(この講堂は、小野梓の地位に相応しい規模と内容をもった大殿堂にすべきである)、坪内逍遙記念演劇博物館、会津八一記念東洋美術陳列室(この陳列室は、「会津八一記念博物館」に改組すべきである)があり、新たに、「津田記念室」と「市島記念室」とが設けられたが、本学の発展の大恩人たる高田早苗先生の名を冠した施設が皆無というのは、どうしたことであろうか。この機会に再考すべきであろう。もともと、野口館長は、旧図書館を本格的図書館として再整備することについては、並々ならぬ意欲と決意を抱いておられる。私の夢もそこに託したい。高田図書

館実現の夢は、決して夢のまま終ることはない。私は確信している。たしかに、他のキャンパス図書館分館のように地名を冠すると「戸塚図書館」ということになるのであろうが、私には、旧図書館建設に賭けた高田先生の意気込み——大学は亡ぶとも、図書館が残ればよい——を想えば、ここはなんとしても「高田早苗記念図書館」としたいのである。

エピソード

かつて、私は、ワセダ・ユニヴァーシティー・ライブラリー・アイデンティティー（W・L・I）の試みの一つとして、中央図書館を「知の砦」たる「春城」と称してはどうかと提言したことがある（『ふみくら』二〇号参照）。もともと、市島謙吉先生の号「春城」は、先生が高田新聞創刊のため高田（現在の上越市）に赴く壮行会の席上で、高田にあった上杉謙信の居城「春日山城」に因んで友人の山田喜之助より贈られたものである。したがって、私は、中央図書館を春日山城になぞらえて「春城」と称してみてもどうかと愚考してみたわけである。

ヨーロッパでは、巨大な居館ないし屋敷をシャトーとかシユロスと呼ぶことが少なくない。その伝でいえば、中央図書館は立派なシャトーであり、シユロスである。もともと、私自身、中央図書館を「春城」と称するのは、W・L・Iとしても少々幼稚であると思わないでもない。ただ、私の脳裏には、見たことのない幻の名城「春日山城」のイメージが中央図書館の雄姿とダブって浮んでくるのである。端的にいうと、中央図書館は私にとってまさしく「春城」そのものなのである。

いずれにしても、中央図書館は無事閉館した。市島先生が旧図書館に託した夢は、新中央図書館の開館によって、さらに大きくふくらんだのである。「新しい皮袋には、新しい酒を満たさねばならない」時代が到来したのである。で

は、新しい酒とはどのようなものであろうか。いまは、その問いに答えなければならない時点にさしかかろうとしている。その際、入館者数が当初予想したよりもはるかに多数であったという現在直面している事態が、否応なく、図書館サービス業務の向上を迫っているという明白な事実から、すべては出発しなければならないのではないか。物事の終点は、物事の始点でもあるのだということを忘れてはなるまい。中央図書館は永遠に早稲田大学の「熊野路」でなければならないのである。

(おくしま たかやす 法学部教授・法学部長・前館長)